九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡医学雑誌の廃刊，そして福岡医学会の解散に寄せて

赤司，浩一
福岡医学会会長

https://doi.org/10.15017/7343657

出版情報：福岡醫學雜誌. 114 (4), pp.131-, 2025-03-25. 福岡医学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

福岡医学雑誌の廃刊，そして福岡医学会の解散に寄せて

福岡医学会会長
九州大学大学院医学研究院　病態修復内科学教授

赤　司　浩　一

福岡医学会幹事会（令和 5 年 7 月開催）において令和 6 年 3 月に福岡医学会を解散し，機関誌である「福岡医学雑誌」を廃刊することになりました．前身である「福岡醫科大學雜誌」時代を含み約 120 年の歴史がある福岡医学雑誌が廃刊を迎えることは，誠に残念です．

創刊時，本誌は「研究と実践の成果を報告し，各分野の最新動向を伝える大学紀要」として位置づけられました．当時は解剖学・生理学・病理学・内科学・精神科などの研究論文や学内行事，学友会活動など幅広く扱っていましたが，1920 年（大正 9 年）以降，第 13 巻から医学専門誌として特化し，1940 年（昭和 15 年）の第 33 巻からは福岡医学会の機関誌「福岡医学雑誌」と改称して発行を続け，現在に到ります．

当時の限られた出版事情の中で，福岡医学会は，本誌の発行を通じて地域の学術成果を広く世に知らしめるという重要な役割を背負っていました．例えば稲田龍吉博士（内科学第一講座初代教授）は，大正 4 年にワイル病の病原体発見の詳細を本誌に報告しています．また，カネミ油症に関する論文は継続的に掲載されており，大変貴重な報告となっています．本誌の歴史的な役割に関しては，住本英樹名誉教授から本号に，詳細にわたってお纏め頂いています．

福岡醫科大學雜誌の年間ページ数は，1922 年には約 1,000 頁，1928 年には 2,000 頁，1934 年には 3,000 頁を超えるまで増加しました．太平洋戦争の影響で 1944 年に発刊が中断されましたが，1947 年に復刊後，1958 年には年間 3,555 頁，1965 年には 5,399 頁とピークに達しました．当時は学位論文を単著で出す必要があったため，すでに共著の英文論文として国際誌に投稿されたものが，単著の和文学位論文として福岡医学会誌に再投稿されていました．しかし，時代とともに国際的に二重投稿は許されなくなり，学位申請要件は「査読制度の確立している欧文雑誌に採択・掲載された論文であれば，共著論文でも筆頭著者であれば可とする」と変更されました．その後，急激に投稿数が減少しました．

このような状況を受けて，廃刊に関する議論がたびたびくり返されました．1997 年に，九州大学医学部教授会構成員を対象に福岡医学雑誌継続に関するアンケート調査が行われましたが，それでも続行を支持する意見が 7 割近くを占めました．しかし，2000 年には年間約 300 頁まで減少してしまい，その後は，新任教授に自己紹介を兼ねてご自身の研究分野の総説を投稿して頂くなど，編集委員会は工夫と努力を重ねてきましたが，終に 2022 年には年間 100 ページを切るに到りました．

また，各専門医学領域に全国レベルの学会と地方会が存在し，県，市の医師会が医療状況の変化に迅速に対応している現代に置いて，福岡医学会としての存在意義を定義するのは難しく，その活動は主として福岡医学雑誌の発行に限られていました．

以上を鑑み検討した結果，福岡医学会幹事会は，福岡医学雑誌を廃刊し福岡医学会を解散する，という苦渋の決断を致しました．先人達が戦時下を含む様々な状況下で貴重な時間を割き，丹精を込めて仕上げ発表してきた数々の論文はデジタルアーカイブ化が進んでおり，九州大学医学図書館では保存状態の良い現物も見ることもできます．創刊号を手に取ってみるとその歴史的重みに圧倒されます．

機関誌を失うと同時に福岡医学会も閉じることとなります．誠に残念ではありますが，会員の皆様におかれましては新しい時代に向けての「名誉ある撤退」として受け止めて頂ければ幸いです．今まで福岡医学会のために奮闘努力して頂いた全ての方々に，福岡医学会最後の会長として心から感謝の意を表したいと思います．